

# 「教会聖堂内でのコンサート」, 「典礼以外 における聖堂内での音楽の演奏について」 ——バチカン典礼省の声明とドイツ司教団の手引書——

吉 田 徳 子  
吉 田 文

## はじめに

1967年に礼部聖省が発布した「典礼音楽に関する指針」<sup>1)</sup>は、「教会音楽」を次のように指定している。グレゴリオ聖歌、これまで全ての時代から存在する多様な種類の多声教会音楽、オルガンその他の演奏を許される楽器のための教会音楽、教会聖歌、もしくは民俗的な典礼用聖歌、そして宗教的な民謡。(MS4.b)

第二バチカン公会議文書「典礼憲章」が発布され、「ラテン語の使用は、ラテン典礼様式において遵守される。ただし特殊権を除く」(SC36.1)<sup>2)</sup>とされてはいるが、「ミサにおいても、秘跡授与においても、また典礼の他の分野においても、国語の使用は人々のために非常に有益な場合が少なくないため、より広範囲にわたって国語を使用することも可能である」(SC36.2)と、典礼に於ける各国の言語の使用を認めた。

また、「行動的参加を推進するため、会衆の応唱、答唱、詩編唱和、交唱、聖歌、さらに、行為すなわち動作と姿勢まで考慮されなければならない。」(SC30.1)と、信徒の行動的参加を推奨し、各司教会議に各国言語の典礼書、そしてそれに応じた聖歌集の作成と編さんを促した。

その結果、各国言語で儀式が執り行われ、各国言語による聖歌が歌われる様になり、信者が典礼へ行動的に参加する本来の目的は果たされた。しかしそれと同時に、「教会は、グレゴリオ聖歌をローマ典礼に固有な歌として認める。したがってこれは、典礼行為において、他の同等のものの間

で首位を占めるべきである。」(SC115)とされているグレゴリオ聖歌を初め、多くの多声教会音楽が典礼内で捧げられる機会も少なくなった。

日本では、「典礼聖歌」が編さんされ典礼で歌われるようになると同時に、ヨーロッパから宣教師らを通して伝えられた聖歌はあまり使用されなくなってきた。これも、日本人が独自のことばと音楽をもって神への賛美を歌い祈ることができるようになった反面、グレゴリオ聖歌やヨーロッパの伝統的な聖歌に基づく典礼用の楽曲をレパートリーとするパイプオルガン作品の福音告知的性格が理解される機会が減り、「パイプオルガンは、その音色が、教会の祭式にすばらしい輝きを添え、心を神と天上のものへ高く掲げる伝統的楽器として、ラテン教会において大いに尊重されなければならない。」(SC120)とされている楽器を、主に「聖歌伴奏」のみに使用する結果となり、パイプオルガン本来の役割のなかでも限られた面しか果たせなくなってしまうという結果ともなっている。他方、「細心の注意をもって保存、育成されなければならない」(SC114)とされている「教会音楽の宝」である多声教会音楽、そしてオルガン音楽の多くが、一般の愛好者・団体により教会の外で演奏され、聴かれているという矛盾も生じている。

しかしこれは、キリスト教徒以外にも教会音楽に関心を持つ非キリスト教徒の数が多大である日本の実情を示すものでもあり、教会音楽を通して本来の教会音楽の場である「教会」、そして教会の告げる「福音」を知らせる有益な機会が在り得るともいえるのではないだろうか。

本稿では、日本という、ヨーロッパとは異なる文化的・宗教的土壌の国での典礼以外で演奏される教会音楽のあり方を探ろうと予定している次稿「典礼以外での、音楽による福音告知の可能性(仮題)」への土台として、バチカン典礼省が発表した「教会聖堂内でのコンサート」についての声明を翻訳すると共に、ドイツ司教団が発行した手引書「典礼以外における聖堂内で演奏される音楽」を取り上げ、教会でのコンサートについてのバチカンの立場を明確にし、ドイツ司教団の取り組みを紹介したい。

## 1. バチカンからの声明「教会聖堂内でのコンサート」

1.1 1987年に「教会聖堂内でのコンサート」についての声明がバチカンから発表され、カトリック教会としての教会でのコンサートの扱いについての方向性が付けられた。これに依れば、教会でのコンサートは、福音を伝え、教会音楽の宝を守り育成する機会として望ましいものであるとともに、聖堂という神の家にふさわしい品格と内容のものであり、教会の教えにそむかないもの、そして、真の意味での教会音楽が、教会音楽の目的である「神の栄光と信者の聖化」(SC112)のために演奏される機会である場合に於いて、と規定されている。

### 1.2 本文

#### 教皇座告示

#### 典礼省

「教会聖堂内でのコンサート」についての声明

『聖堂内でのコンサート』

#### I. 聖堂内における典礼以外の音楽（演奏）

1. 音楽への関心は現代文化の性格を表わしている。古典的な音楽がラジオ、テレビ、レコード、カセットなどを介して家庭でも容易に聴けることから、（生の音楽を演奏する）音楽会への人気も高まった。これは良い兆候である。器楽演奏や声楽は精神的高揚に多く貢献するからだ。

演奏会開催の度数が増えてきて、最近幾つかの国々では教会堂をコンサート会場に利用する頻度が高まっている。その理由は多様である。まず、適した会場がほかに容易にみつからないという理由がある。音響の問題もある。教会堂が（演奏上の）要求によくマッチするからだ。また、演奏会の会場として美しい場所をほしいという要望から来る、美的な理由もある。さらに、多くの（教会音楽の）作品を（聖堂という）本来の場所で演奏したいというもっともな理由。それから純粋に実際的な理由もある。とりわけオルガンの演奏会だ。ほとんどすべての教会堂にオルガンがあるからだ。

2. こうした文化的な動きと同時に教会内には新しい事態が生じてきた。「スコラ・カントールム」(聖歌学校)や教会の聖歌隊が、従来のような多声教会音楽のレパートリーをミサ聖祭などの典礼内で演奏する機会が減ってきたことである。そこでこうした教会音楽を聖堂内でコンサートという形で演奏することが始まった。同様にグレゴリオ聖歌も教会内外のコンサートプログラムにとりいれられるようになった。

もう一つ大切なのは『教会音楽の催し』という動きである。確かにそこで演奏される音楽は、宗教的なテーマを持つものであったり、そのテキストや内容が宗教的であったりすることから『宗教音楽』と呼ばれる。多くの場合そうした教会コンサートでは朗読や祈り、静けさの時間を織り込むことがある。そのように構成されたコンサートは「教会音楽をともなう黙想」となる。

3. 教会堂内でのコンサートが増えるにともなって、司祭や教会の長は幾つかの問題に対応しなければならなくなった。神の家をあらゆる種類のコンサートに開放すれば、多くの信徒から反発や非難をうける可能性がある。反面、無差別にコンサートを拒絶すればその主催者や音楽家、歌手たちから誤解されたり不満を持って受け止められたりするだろう。とりわけ大切なのは、教会堂の本来の意味と目的を示すことである。それゆえ、典礼省は、各国の司教会議とそれぞれの国における典礼と教会音楽の委員会に対して教会堂内における典礼のための器楽ならびに声楽、宗教的なインスピレーションによる音楽、非宗教的音楽等、各種音楽の使用に関する教会法上の規範を考え、解釈するための幾つかの点をそれぞれの管轄の枠内で提示するのが適切だと考えた。

4. こうした情勢の中ではすでに公表されている文書、特に聖なる公会議の聖祭に関する基本法、1967年3月5日の教会音楽規則、1970年9月5日の典礼改定規則等を改めて読む必要がある。さらに教会法1210、1213、および教会法規範の1222を顧慮すること。

本冊子においては主として聖祭典礼以外での音楽演奏について述べる。

典礼省は、このようにして、各司教がそれぞれの社会的・文化的な事情を考慮しながら適切な、司牧的決定をくだす助けとしたい。

## II. 考慮すべき点

### 教会の本質と目的

5. 聖堂と祭壇聖別の儀式によって証明される伝統に従うと、教会は何よりもまず神の民が集まる場所である。「この聖なる民が教会である。三位一体の神が彼らの統一の起源である。教会は生ける石で建てられた寺院であり、その中で聖霊であり、真実の父である方が礼拝を受けるのである。したがって昔からこの建物を正當に“教会”と名づけ、その中でキリスト教徒が集い、神の言葉を聴き、ともに祈り、秘蹟を受け、聖体の祭儀を祝い」（「教会祝別と祭壇祝別の儀式」II章1号）そしてこれを永続的秘蹟のしるしとして拝礼するのである。

したがって教会堂は、これをどのような種類の集会にも提供されるような単なる「公共的」空間とみなしてはならない。むしろ教会堂は聖祭のために永続的に聖別ないしは祝別された「特別な」聖なる場所である。目で見える建物としての教会堂は地上で巡礼をする教会のしるしである。天上のエルサレムを告げる家であり、神と人の共同体の神秘がすでにここ、地上において現実となるところである。都会でも田舎でも教会堂は常に神の家であり、人々の間の神の家を示すものである。そのようなところであるから、教会は典礼が行われていなくとも常に神聖な場所なのである。

慌しさと喧騒に煩わされる現代社会において、とりわけ大都市の教会堂は人々が静けさや祈りの中で霊的平安や、あるいは信仰の光を見出すのにふさわしい場所ともなっている。

これは教会堂が本来のあり方のままに留まる時に可能となる。もし、教会堂が本来のあり方と異なる目的に利用されるならば、教会堂はもはや人の心の内の神の現存のしるしではなくなる危険に陥る。それによって信仰

生活の発展への寄与をなす能力が減退し、神の民は畏敬の姿勢をそこなうことになる。主の言葉は次のように論している。『わたしの家は祈りの家でなければならない』（ルカ 19,46）

### 教会音楽の意味

6. 教会音楽は、声楽であれ器楽であれ、特別な好意を持って推奨されるに値するものである。教会音楽は「聖祭典礼のために作られた音楽であり、神聖さと善性を形にそなえるもの」(MS, n. 4a) とわれわれは理解している。教会は教会音楽を「他の諸芸術の表現にまさり、はかり知れない価値を持つ宝庫」とみなし、「教会音楽を聖祭における奉仕の役割をはたす」もの(SC, n. 112 参照)と認識している。教会は「教会音楽の宝を最大の注意を持って保存、育成すること」(SC, n. 114 参照)を勧める。

教会音楽が聖祭典礼内で演奏されるとき、音楽は聖祭典礼の特性に適合させるべきだ。このことはしばしば、信徒たちの典礼への実際的な参加が真のキリスト教精神の源泉とみなされていなかった時代(SC, n. 14; ピオ 10 世 *Tra le sollecitudini* 参照)にできた作品の使用を制限するよう義務付けることとなる。

このような音楽作品の演奏における変遷は、典礼の分野における他の芸術創作で行われたことと似ている。司祭席や朗読台、祭壇を司祭が人々の方に向くようにする「*versus populum*」などを含めた、祭壇の空間が新しい形にしつらえられたのがそうである。これは過去をないがしろにするものではなく、集まった人々が実際に（聖祭典礼に）参加するという一つの大変な目的のために起こったことである。こうした改革の枠内で多くの音楽作品が聖祭典礼内で規制を受け、教会音楽は典礼外で、教会音楽のコンサートで全体として提供されることになる。

### オルガン

7. オルガンは今日典礼の中ではわずかな機会にしか使用されなくなっている。かつてオルガンは信徒の積極的な参加に代わるものであった

り、信徒たちを「沈黙と無為の祭礼の傍観者」としての役割（ピオ 11 世、*Divini Cultus*, n. 9）に導いたりすることも多かった。

オルガンは会衆や聖歌隊の歌唱を伴奏したり、バックアップしたりできる。しかしオルガンの響きが司祭の祈りや歌、朗読者や助祭の読み上げる朗読にかぶさってはならない。

オルガンの沈黙は、贖罪の期間（四旬節、受難週間）や待降節、死者の典礼では、しきたりに沿ってまもられるべきである。歌の伴奏のみ許される。ミサ聖祭の準備とかその締めくくりには長めのオルガン演奏がふさわしい。

非常に大切なのは、すべての教会堂において、とりわけ格の高い教会堂では、教育を受けた音楽家と（品）質の良い楽器を用意することである。歴史的なオルガンはその特質から維持にむけて特別の配慮をするべきである。

### 実施上の規則

8. 教会堂の使用を定める規定は現行教会法典の *Can. 1210* に依る。そこには次のように述べられている。「聖なる場所では聖祭の実施あるいは促進に役立ち、敬虔と神への畏敬に尽くすもののみが許される。場所の神聖さと一致しないものは禁じられる。ただし、教区の司教は、個々のケースに応じて、場所の神聖さに反しない使用を許可することができる。」

使用目的が、場所の神聖さに反してはならないとする基本原則は、教会堂を教会音楽および宗教的な音楽を演奏するコンサートのために開放すべきかどうかの基準となる。教会堂はその他の種類の音楽には開放すべきではない。したがって例えばいかに美しい交響曲であっても、それ自体は宗教曲ではない。宗教曲と名づけられるには、器楽曲にせよ声楽曲にせよ、本来の目的と内容から発するものでなければならない。教会堂の中で宗教的インスピレーションによらず、特定の世俗的な関連で作曲された音楽を演奏するのは、仮にそれがクラシックや現代の音楽であろうと、高尚な、あるいはポピュラーな音楽であろうと、それは正当でない。教会の神聖な

性格にも、ふさわしくない環境のなかで演奏される音楽作品にも配慮されないからである。

神聖な場所における全権を自由に行使するのは教会の權威にそなわる義務である。

9. 典礼のために作曲されたものの上記の理由からもはやミサ聖祭等の典礼に用いられなくなった教会音楽や、聖書の言葉や典礼からインスピレーションを受けた、あるいは神、おとめマリア、聖人、教会を主題とした宗教音楽はすべからず教会内にその場を占めるものであるが、しかしそれは聖祭典礼以外の場合においてである。オルガンの響きや、その他の声楽、器楽の演奏は敬虔さや宗教心を促進することができる。これらを典礼外で上演する際、とりわけ下記の諸点がふさわしい。

- a) 大切な典礼の祭日に心の準備をさせるため、もしくはミサ聖祭以外においても、祝祭の性格を高める。
- b) さまざまに異なる典礼暦の特別な性格を強調するため。
- c) 教会堂の中に静けさと観想の雰囲気をつくり、教会からはなれている人たちにも霊的なものへの傾倒を促すため。
- d) 神の言葉を伝え、その受け入れを容易にする環境をつくり、たとえばそのなかで福音書を（続けて）朗読する。
- e) 失われてはならない教会音楽の大きな宝を守るため。今日ではもうそのままでは容易に典礼に取り入れられない作品や声楽曲などを指す。オラトリオやカンタータなど今日においても霊的な豊かさを与える宗教音楽もそうである。
- f) 教会堂を訪れる人や観光で来る人たちに教会の神聖な性格をより良く理解する助けとなるために。例えば決まった時間にオルガンコンサートを行うなど。

10. コンサートの主催者が教会堂内でのコンサート開催の希望を表明するとき、現地の司教に「状況に応じて」諾否の付与が任される。許可は一つの決まった日時に適用される。したがってフェスティバルの期間とか一連のコンサートをまとめて許可することはまったくできない。



教区の司教は、必要とみなされる場合、教会法 Can. 1222§2 に予定されている条件に基づき、聖祭には使用されなくなった教会堂を教会音楽ないしは宗教音楽の演奏と、世俗音楽の演奏のために使用することを許可できる。ただし、これらの演奏は場所の神聖さと一致することを条件とする。

こうした司牧的使命を果たすについては、典礼と教会音楽のための教区委員会が教区司教を相談役として補佐することとする。

教会堂の神聖な性格を保護するため、コンサートを許可する際には教区司教が次の条件をふまえて細則を決める。

- a) 主催者は教会堂使用の申請を早めに書面で教区の司教に提出すること。日時、時間、作品名と著作権所有者の名前をそえたプログラムを申請書に明記すること。
- b) 管轄の小教区司祭あるいは教会主任が教区司教から許可を得た後に、上記の条件を満たす（ことが明らかであれば）合唱団とオーケストラに教会堂の使用を認めることができる。
- c) 教会堂への立ち入りは自由で、無料でなければならない。
- d) 演奏者も聴衆も着るものや振る舞いにおいて神の家の神聖な性格に配慮すること。
- e) 器楽演奏者と声楽家はできるだけ内陣に立ち入らないように。祭壇、朗読台、聖職者席への畏敬を保つこと。
- f) ご聖体は、できるだけ脇聖堂あるいはその他安全で、しかるべき場所に安置するように（Can. 938§4CIC 参照）。
- g) コンサートの前に解説をすることは可能である。コンサートの際に説明が行われるときには、単に芸術面とか歴史上のデータを述べるだけでなく、聴衆により良く理解してもらい、内的な関与に向けて導くようすべきである。
- h) コンサートの主催者は賠償責任、諸経費の負担、建物内の整理、損害発生時の責任負担を書面で保証すること。

11. 上記の実施上の規則は、ミサ聖祭、祈り、黙想のために定められた

教会堂の特別な性格を常に維持するために司教と教会指導部がはらう司牧的努力の助けを意図するものである。従ってこの指示は音楽芸術に対する関心の欠如とみなすべきではない。

教会音楽創造の宝はキリスト教の信仰が人間の文化をいかに促進できるかを示す雄弁な証しである。

教会音楽、宗教音楽がそれぞれにふさわしい地位を認められることによって、キリスト教徒である音楽家、功ある「聖歌学校」(スコラ・カントールム)あるいは聖歌隊は、彼らの伝統をさらに育み、伝統を信仰のつとめの中で活力あふれるものとして保つようにとの、はげましを感じるのである。これこそ次に記す第二バチカン公会議が芸術家に向けた勧告に沿うものである。「あなた方の才能を神の真理に奉げることを拒絶しないように。私たちの生きる世界は美を必要とする。絶望に身をゆだねないためである。美は、真実と同じく、人々の心の奥に喜びをもたらす。そしてこれは主であるあなたの創造の手によるのです。」(Vaticanum II, 芸術家に寄せるメッセージ 1965年12月8日)

ローマ, 1987年11月5日

パウル・アウグスティン・マイヤー枢機卿  
聖省長官

ヴィルジリオ ノエ  
ヴォンカリア名誉司教  
書記

## 2. ドイツ司教団の手引書「典礼以外に聖堂内で演奏される音楽」

2005年7月1日にドイツ司教団は作業への手引き「典礼以外に聖堂で演奏される音楽」<sup>3)</sup>を発行した。

この書は導入部、2つの大きな部分から成り立つ文書の中心部、そして参考文献と連絡先という4つの項目を含んでいる。文書の第一部では「神学的、人間学的手がかり」(Theologische und anthropologische Zugänge)として、典礼以外に教会の中で音楽を演奏することについての賛否両意見が存在すること、その時点での状況の描写、そしてその背景の明確化について言及している。

第二部では具体的に現場で応用できる推進策と見通しについて、例を挙げている。

この文書全てを訳すことは本稿の枠を大きく超えてしまうため、以下に各項の要所を紹介しよう。

## 2.1 レーマン枢機卿の序文

「序文」として当時の司教団の議長であったマインツの司教レーマン枢機卿が次のように述べている。

教会でのコンサートは、カトリック教会が一般社会へ文化的に貢献するという意味で非常に重要な意義を持っている。典礼内の音楽の扱い方については、教会の公的な側からも多くの見解が出されているが、ドイツ語圏に見合った典礼以外に聖堂内で演奏される音楽の扱い方についての包括的な教示は提示されていなかった。1987年に発表された「教会聖堂内でのコンサート」はクラシックな教会コンサートについて助けとなる枠を与えたが、諸国の特性についてまでは応じられず、又、その後の展開についても思索できるものでもなかったであろう。

今までの数十年間のうちに、特にドイツ語圏での「典礼以外に聖堂内で演奏される音楽」の状況は変化を遂げている。これを受けてドイツ司教団はこの分野での独自の文書を公表することとした。その準備として教会音楽の現場で責任者として働いている人たちとの意見の交換が行われ、この文書の草稿はドイツ司教団の典礼委員会とセシリア協会<sup>4)</sup>の代理者を含めたドイツ各司教区の教会音楽課の作業共同体の間で作成された。

この手引書はインパルスを与え、経験をまとめ、実際の現場での参加を

建設的に導き、助けとなるガイドラインである。典礼外の聖堂での音楽での音楽が文化的だけではなく、司牧的なチャンスの機会として認められることを期待する。

## 2.2 導入部

この序文と本文の間に導入として「なぜ典礼以外に聖堂内で演奏される音楽についての新しいガイドラインが必要なのか？」という項目が設けられている。a)「誰に向けたガイドラインか」という点で、司祭、教会の長、司牧委員会、教会音楽家という「教会内」で直接従事する人間に向けては、どの音楽の種類が教会の聖性と調和できるか、世俗的なコンサートの演奏場所としてどの程度使用できるか、などに加えて、演奏者と聴衆のふさわしい行動について具体的な指針を与えるガイドラインであることが述べられている。b)「ガイドラインの動機」として、音楽が宗教的経験のための媒体であるように、教会と音楽を切り離しては考えられない性質について述べられた後、典礼内での音楽については多くの文献があること、しかし今まで触れられることのなかった典礼外での音楽について、又、典礼とは直接脈絡のない音楽をどう扱うかなどがこの文書の目的としてのべられている。そして、1987年に典礼省から各司教団団長へ宛てられた『「教会聖堂内でのコンサート」についての声明』では、教会内のコンサートの実行を勧めていることについて言及している。ここ数十年間の間に教会と社会の状況は変化しているが、特にドイツ語圏の教会では、典礼外での音楽演奏の伝統は、隣人への文化的奉仕であるとともに、「宣教的な教会」を体現する伝統的なものでもある。この文化的奉仕とキリスト教の福音告知の結合は他に類を見ない特別なものでもある。これらの理由からドイツ司教団の典礼委員会はこのガイドラインを発行する必要性を覚えた、としている。

## 2.3 本文

### 2.3.1 第一部「神学的，人間学の手がかり」

#### 2.3.1.1 第1章「典礼以外に聖堂内で演奏される音楽については賛否両論が存在する－現下の状況描写」

第1章は、「典礼以外に聖堂内で演奏される音楽については賛否両論が存在する－現下の状況描写」として、「伝統的な多声教会音楽－典礼外か典礼内か？」(1.1)<sup>5)</sup>という項目から始まっている。

ここでは第二バチカン公会議による典礼改革の結果，典礼内での使用が制限（「追放」と取り違えてはならない）されることになった多声教会音楽について，典礼内ではその都度細心の注意をもって慎重に考慮され使用の可能性が吟味されるべきであり，典礼内でこれらの作品の演奏の場が与えられないのであれば，典礼外でも演奏される場が与えられるべきであり，それは可能な限り「教会」という本来の場であるべきである，とされている。

続く1.2項で，「宗教的音楽－コンサートホールか教会か？」という点では，神聖な建築物と神聖な音楽は適切な（好ましい）芸術の統合となり，聴衆に総体的に訴えかけることが可能であり，多くの人が「教会コンサート」を，ことばの言語が限界に達するときには始まる心の言葉としての「神性の預言と啓示の形としての音楽」，「告知の出来事（Verkündigungsgeschehen）」として経験することができるため，宗教的な作品は本来の場である教会に帰する，としている。

「キリスト教の音楽遺産－教会の辺境（Randbereich）か信仰媒介の重要な道か？」と題された1.3項では，教会内の中心的執行である典礼，カテケーゼ，信者の共同体などは，教会に帰さない人々たちにとっては普段近くことのない領域でもあるが，教会の文化的行為はこれらの人々へも繋がる重要な橋であることができる。又，教会の文化的貢献は宣教の手段となつてはならず，押し付けがましくなく自然に作用するものである，と，文化を一つの架け橋として例えている。

そして，減少する信者数と聖職者の不足から生じる教会の新しい使用・

保存方法の模索, 経済的な観点と並び, 教会聖堂という場以外に文化的事業を行う場のない地方の現状等も取り上げ, 1.4 項では「教会内での一般のコンサート事業が一致か矛盾か」という点を扱っている。教会で行われるコンサートは大抵の場合廉価な料金で入場できるため, 収入の有無に関わらず多くの層に提供される。これもキリスト教的文化奉仕であるとも言える, としながらも, 教会外の主催者によるコンサートは, 経済的な利害関係が宗教上の観点よりも強くなってしまう危険をはらんでいると注意を促している。

### 2.3.1.2 第2章「典礼外の聖堂内での音楽：その背景の明確化」

この章ではまず, 「宗教音楽」という観念について説明がされている。(2.1)

「典礼音楽 liturgische Musik」とは, 公式の典礼の具体的な形式のために作られた作品を指し, これは「宗教的音楽 geistliche Musik」の一部である。「宗教的音楽」は典礼音楽の他にも聖書や教会の神学からインスピレーションを受けたテキストを使用したり, テーマ(題)とした作品ではあるが, 基本的に典礼内で使用することを目的とせずに作られた音楽である。これは又, 「宗教音楽 religioese Musik」という大きな観念の一部でもある。「宗教音楽」とは, 作曲家, 演奏家, そして聴衆から主観的に宗教的だと感じられ, その内なる意向と作用が聖なるものと超越的なものに向けられたもの, と理解されるだろう。しかし何が「宗教性」なのか, ということは, テキスト, 演奏される場, 楽器, 演奏する人間の心構えだけを考慮して定義できるものではなく, 聴衆の心・心の奥の自己へ到達する音楽の深い意図, というところにある。

次項の「演奏者, 聴衆, 主催者の役割について」(2.2) では, 演奏者は技術, 知識に長けているだけではなく人間としての温かみ, 音楽を伝える心を持ち, 信者の信仰への内的な参加を促進するものでなければいけない。又, 自身が信者ではない演奏者に対しても, 感入能力, 聖性への尊敬心, 芸術的自己批判の能力, そして新しいもの, 慣れないものへの積極性が必要で

あり、これらのことを受け入れるならば、教会に属さない演奏者にも霊的、宗教的な豊かさを期せずとも得る機会になるかも知れない、としている。

聴衆については次の様に述べている。音楽は祈りを言葉無しで表現することができる。又、音楽を通して自分自身の心の動きを知ることは、言葉では表せない感情に音楽の響きを纏わせて神へ捧げることができることにもつながり、霊的な助けとなる。宗教的な音楽を聴くということは、行動的に聴くということでもあり、音楽が伝え、心に残すものによる「聖化」(SC112)となる。しかし、現代の社会では、「聴く」行為の前提となる「静けさ・沈黙の時」にも欠けているため、この「時」も大切にされなければいけない。

次に「主催者」についての項が続く。コンサートが催される前にはその内容についての十分な吟味が必要不可欠であり、その判断の手段は第二部に実用的な形で挙げられる。催し物の施行が決定した場合には、信徒、小教区は勿論のこと教会の暦、社会的事情等全ての要素が調和するように運営されるべきである。ただ聴くだけではなく、音楽を通して心に触れるものがあるであろう聴衆のことを具体的に考えながら企画をするべきである。しかし内容は、好まれるもの、伝統的なものだけではなく、「旅する教会」(教会憲章、第7章)として信徒の霊性を奨励するために、常に新しいもののへ戸口を開いていなければならない。

2.3 項では「声楽と器楽の関係について」として、前半では、キリスト教音楽の成立期は他の宗教から区別するという意味からも声楽のみで儀式が執り行われていたこと、現代では全ての器楽が教会からは排他されないこと、しかし幾つかの楽器は楽器の性格上ではなく、その楽器をとりまく環境から教会の品性と離反するように考えられることとしての楽器の取り扱いについて述べられている。後半では声楽曲に目を向け、聖なるテキストそのものが歌われる声楽曲は器楽曲に比べて優先的に扱われやすいこと、しかし、世俗曲から成立した聖歌も存在することが挙げられる。よって、教会音楽の中では器楽か声楽か、又はどの楽曲が適切か、なのではなく、いかに聴衆に訴えかけるか、そしていかに聴衆を霊的に豊かにするか、

が問題となってくる。

「ライブ音楽と録音された音楽の関係について」とされた次の項目(2.4)ではライブ, いわゆる生演奏は演奏者と聴衆の間の交わりであり, かつ創造的行為であることから, 録音された音楽ではとって替われないこと, 録音された音楽は絵画による瞑想の時など, 音楽の代替が不可能な場合のみに許容されるもの, としている。又, 観光客が多い聖堂内で, 録音された音楽を流すことにも触れており, グレゴリオ聖歌は歌われて意味をなすものなので録音は使用されてはならないこと, 他の音楽は吟味した上で入念に判断をすること, としている。

第2章の終わりである「『神と人間の家』としての聖堂」(2.5)の項では, 次の事項が書かれている。全ての聖堂は人間が神と出会う場所であるから, 他の場所とは区別されなければならない。音楽の催し物もそのことを考慮して施行されなければならない。聖堂は神がおられる, 神秘であり神聖な場所であるから, 他の場所とは区別されなければいけないのだが, 他の場所から離れるものでもない。聖堂に足を踏み入れた全ての人が神と共にいる場所でもある。この「神の家」「人間の家」のバランスを取ることが大事である。又, 教会は集まる場所である。人が集まり, 神の賛美を祈り, 歌う場所が教会であり, 楽器の性質や聖堂の響き, 椅子の数が揃っているからコンサートを催す場なのではない。

## 2.3.2 第二部「具体的に現場で応用できる推進策 (Impuls) と見通し」

### 2.3.2.1 音楽の社会的・文化的状況

1987年にバチカン典礼省から各司教団議長宛に送られた声明「教会聖堂内でのコンサート」には「各司教がそれぞれの社会的・文化的な事情を考慮しながら適切な, 司牧的決定をください助けとしたい。(I.4.)」と書かれている。

「社会的・文化的状況」とは社会の総文化に影響する政治的, 世界観的, 歴史的, 物質的な動因のことであり, 諸民族の歴史と現在が多様なように社会的・文化的状況も多様多彩である。音楽についても同様であり, 聖堂



での音楽は国、民族、伝統、演奏の時期などの状況を顧慮しなければいけない。この様に「教会の文化コンセプト『多様性のうちの統一（Einheit in Vielfalt）』」（3.1）の項で教会全般としての方向性を挙げている。そして続く「ドイツ語圏での教会コンサートの特別な意味」（3.2）として、カトリック教会の文化的奉仕の伝統と現代社会での必要性が述べられている。

第4章では実際に教会でコンサートを行う際に用いられる規準が挙げられる。コンサートの前に聴衆が充分コンサートの音楽の内容は勿論のこと、霊的、宗教的内容・背景について理解ができるように、準備が必要なのが4.1.項で挙げられ、次項では、コンサート自体が典礼的な要素を踏まえることもできるとし、その実行のためにできる事柄を挙げている。4.3項はコンサートの内容について扱い、教会の暦、社会的状況に合った選曲の必要性の他、コンサートを元来の意味での「ドラマ」（＝HANDLUNG）として、人が人と共に人への Handlung としてのドラマとしても比較している。又、コンサートの内容には一貫性を持たせ、演劇術（Dramaturgie）が一つの舞台に緊張と緩和を調和させるように、コンサートでも音楽の受け手である聴衆の状況に合うように宗教的な次元を現すことが重要だとしている。4.4ではプログラムノート・パンフレット記載についての詳細が指示されており、作品の神学的・歴史的・音楽的背景を紹介することの必要性、特に外国語のテキストの場合は翻訳を掲載すること、又、演奏者の履歴、協賛などの一般的事項は簡潔にまとめることなどが指示されている。4.5、4.6の項はそれぞれ聖堂内での振る舞い方について、そして演奏者と舞台装置の位置について記載されている。カトリック教会に属さない人にも、神の家としての聖堂の聖性を理解できるようにするなど、教会側から聴衆・演奏者に示すべき行為、ご聖体を他の場所に安置するなどコンサート前に教会がしておくべき準備態勢、そして聖堂の使用基準を挙げている。4.7項では教会主催ではなく外部の主催者がコンサートを催す場合についての細かな注意事項が掲載されている。重要なのは、いかに教会側に対する経済的メリットが多くとも、カトリックの信仰教義

と品性に反するコンセプトは許可されない,ということである。4.8 と 4.9 では法律的・経済的な観点が挙げられ,著作権,諸保険,税金の扱い方についての指示とコンサート施行の際に生じる金銭的な詳細事項についてが述べられている。最終項の4.10では教会コンサートの許可手続きと題され,教会コンサートの許可手続きはその地の教区司教が担当する司教区の為に決定する,とされている。

## 2.4. 参考文献と連絡先

この項では参考文献として a) 典礼以外に聖堂内で演奏される音楽について言及されている教会の公的な文書, b) 公的文書についての解説をする文書, c) 宗教的音楽についての解説を内容とするスタンダードな文献, d) 実際に教会でコンサートを行なうことについての解説書,そして連絡先としては a) 司教区を超えて存在する機関, b) 各司教区の教会音楽課,がリストアップされている。

## 3. おわりに

以上,教皇座告示典礼省「教会聖堂内でのコンサート」についての声明の翻訳,並びにドイツ司教団の手引書「典礼以外に聖堂内で演奏される音楽」の内容の紹介を試みた。

教会でのコンサートは,教会聖堂という神聖な場所にふさわしい内容のものであれば,その実行が勧められるものである。神の栄光と信者の聖化のためはもとより,普段教会へ足を運ばない人への架け橋としても重要な役割を果たす。教会暦に合った「降誕節」「復活祭」等のテーマを提示することにより非キリスト教徒への語りかけが明確となるであろうし,聖書の朗読と対応する音楽を組み合わせることも考えられる。次稿ではこれらの具体的な例を示しながら,教会音楽を通しての福音告知の可能性を探りたいと思う。

## 謝辞

末筆となりましたが、「教皇座告示典礼省『教会聖堂内でのコンサート』についての声明」のドイツ語から日本語への翻訳の際にはケルン市の吉田慎吾氏に大変お世話になりました。この場を借り心よりお礼を申し上げます。

## 注

- 1) Ritenkongregation, Instruktion ueber die Musik in der heiligen Liturgie „Musicam sacram“ (1967. 3. 5.)
- 2) 典礼憲章の訳は南山大学監修「第2バチカン公会議公文書全集」による。
- 3) Arbeitshilfe „Musik im Kirchenraum ausserhalb der Liturgie“ 2005. 7. 1., Hsg.: Sekretariat der Deutschen Bischofskonferenz
- 4) Allgemeiner Caecilienverband fuer Deutschland (ACV), 1868年に創立されたカトリック教会の合唱連盟。真の教会音楽の復興と普及を目的とする。
- 5) 以後特別な記載がない限り括弧内の数字はドイツ司教団の手引書「典礼外の聖堂での音楽」の項目を記載する。